

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	中尾 友彰
主な担当科目	インターンシップ①アートマネジメント、インターンシップ②アートマネジメント、ライブビジネスと社会、音楽活動研究①、音楽活動研究②、音楽活動研究③音楽活動研究④、企画制作演習Ⅰ、企画制作演習Ⅱ、企画制作演習Ⅲ、芸術運営演習、音楽芸術環境研究Ⅰ
シラバス	ここをクリック(本学ポータルサイトトップページが表示されます。) ※画面下「シラバス」>「シラバスを検索するにはこちらをクリックしてください。」をクリック
2023年の教育目標・授業に臨む姿勢	全科目において、24年間に及ぶ劇場職員を通じて培った経験や知見等を授業に取り入れ、講義内容を充実させる。アートマネジメント概論では、芸術文化を取り巻く法律の内容と意義に加え、現場における業務計画書への反映方法等も示しながら学生の理解向上を目指す。インターンシップでは、学生の希望と適性を考慮しつつ、有意義な実習となるよう指導を行う。音楽活動研究では、劇場時代に経験した最新のアウトリーチ手法を授業に取り入れる。
2023年の教育に関する自己評価	コンサートの企画制作の手法、ジュニアオーケストラ等の育成事業の運営方法、アウトリーチのプログラム開発等、どの科目においてもアートマネジメント実践における最新の知見を授業に取り入れ、学生の意欲を引き出す授業運営を心掛けた。しかしながら、具体的事例については劇場業界の話に偏りがちであったため、学生の幅広い興味関心に応えられるよう工夫したい。インターンシップについては、これまで培った音楽業界での人脈を活かし、学生の希望や適正について派遣先の職員の方へ詳細にお伝えし、より成果を伴う実習となるように努めた。
2023年のFD活動に関する自己評価	9月のFD研修会は多様な背景を持つ学生が持続的に安心して学べる環境についての研修であったが、日々学生と接する上での学びが多く、ぜひ会場で聴きたい内容であった。学内組織FD研修会では、研修テーマを踏まえつつ、元実務家の視点も交えながら先生方と意見交換を行った。
授業改善のために取り入れた研修内容	FD全体研修会での内容を参考に、ジェンダーやセクシャリティの視点から、多様な背景を持つ学生が安心して学べる環境を構築できるよう授業において配慮した。基礎ゼミFD研修会では、個別クラスの授業についてそれぞれの教員の立場から意見が出されて、今後の授業運営を考える上で参考になった。アートマネジメント学内組織FD研修会では、留学生への接し方や授業実施時の留意点等についての意見交換を行い、授業運営に活用した。

2023 年度(前期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3567 教員名:中尾 友彰

1)アンケート結果に対する所見

「アートマネジメント概論①／Ⅰ」の総合満足度は、「そう思う」「少し思う」の合計が 95.6%であり、一定の評価は得ていると考える。一方で「Q8.自分はこの授業の予習・復習をしている」の数値が、全体平均よりも低いことが気になった。毎回授業の最後に感想と質疑の提出を課し、次回授業の冒頭で必ず回答するようにしているが、他にも予習・復習に役立つような課題等について検討する必要があると感じた。

2)要望への対応・改善方策

成績判定について、シラバスには「課題提出」と記していた。しかし授業を進めるにつれ、学生の学修状況をより詳細に確認するために「筆記試験」へと変更し、この点についての意見が自由記述欄に2件寄せられた。今後はシラバスと変更なきようにしたい。

3)今後の課題

履修人数が多く、さらには知識・情報の伝達が主体の講義であるため、どのように学生とコミュニケーションを図りながら授業を進めるかは大きな課題である。新ポータルシステムへの移行により使用可能となった「クリッカー機能」等も活用しながら、学生との双方向での授業を心掛けていきたい。

以 上

2023 年度(後期・通年)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3567 教員名:中尾 友彰

1)アンケート結果に対する所見

「アートマネジメント概論②／Ⅱ」の総合満足度は、「そう思う」「少し思う」の合計が 100%であり、一定の評価は得ていると考える。一方で「Q8.自分はこの授業の予習・復習をしている」の数値が、全体平均よりも低いことが気になった。毎回授業の最後に感想と質疑の提出を課し、次回授業の冒頭で必ず回答するようにしていることに加え、授業中にも UNIPA のクリッカー機能を用いて課題に取り組む時間を設けていたが、他にも予習・復習に役立つような課題等について検討する必要があると感じた。

「芸術運営演習C」(3 年生ゼミ)については、「そう思う」が 100%を占めており、かつ Q1～Q10 まですべての問に関して「4.00」の評価であった。少人数のゼミだからこそ、きめ細やかな指導が可能となり、履修者が学修を深めた結果ではないか。

大学院修士課程の「音楽芸術環境研究Ⅰ」については、総合満足度の「そう思う」が 100%となっており、こちらも評価を得ていると考える。

2)要望への対応・改善方策

「アートマネジメント概論②／Ⅱ」「音楽芸術環境研究Ⅰ」共に、自由記述欄において、学生からの要望は特になかった。今後は、学生が今以上に能動的に取り組めるような授業教材の開発(パワーポイントの制作等)に努めたい。「芸術運営演習C」に関しては、履修者が興味のあることに関してのプレゼンを繰り返す授業展開を行った。今後も社会において即戦力として活躍できるよう、プレゼン能力の向上について指導を強化したい。

3)今後の課題

「アートマネジメント概論②／Ⅱ」は履修者数が 30 名前後、「音楽芸術環境研究Ⅰ」は 10 名前後であることから、学生と教員、もしくは学生同士のディスカッションの時間を設けるようにしていきたい。学生が授業を通じて学修した内容を、他者へアウトプットすることにより確実に自身へインプットができるように、学生との双方向での授業を心掛けていきたい。「芸術運営演習C」に関しては、学生の夢を応援すべく、就職活動において役に立つ「自己紹介」「志望動機」「学生時代に力を入れたこと」等に関しても一層指導をしていきたい。

以 上

2023 年度(後期・通年)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3567 教員名:中尾 友彰

【企画制作演習Ⅱ／Ⅲ】

教員名:古橋 祐、岸田 生郎、柴矢 敏彦、仁科 岡彦、中尾 友彰

1)アンケート結果に対する所見

総合満足度は、「そう思う」が 87.5%、「少し思う」が 12.5%であり、かつ Q1～Q10 まですべての問に関して全体平均を上回っていることから、評価は得ていると考える。自由記述欄においても、大きなやりがいについてや、この授業だからこそ得られたことに関する意見が目についた。履修者がシラバスの内容を十分に理解し、授業展開を踏まえて、学修を深めた結果ではないか。

2)要望への対応・改善方策

本番日程に関して、「教員が予め決定し、その日程に向けて公演制作を行う形でも良いのでは」との意見があった。確かにそのほうが、集客に関して期待ができる土日開催をしやすいが、一方で学生の企画内容に応じて、柔軟に会場を選択・決定したほうが良いとの考えもあり、継続して検討すべき課題である。

3)今後の課題

今年度は、3 本の企画公演を学生の手で実現させた。いずれも学生は様々な壁と直面したが、時間がかかったとしても、一つずつ自分たちの力で乗り越えていった。今後も、履修者自らが主体的に課題に取り組む姿勢が必要とされる科目であり、当科目が目指す目標や授業内容を履修者に充分理解をさせた上で、積極的な態度で臨むよう指導していきたい。

以 上

2023 年度(後期・通年)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3567 教員名:中尾 友彰

【ライブビジネスと社会】

教員名:森川 卓夫、椎葉 克宏、中尾 友彰

1)アンケート結果に対する所見

総合満足度は、「そう思う」が 86.4%、「少し思う」が 11.4%であり、一定の評価は得ていると考える。コンサートやライブの各分野における実務経験者を週替わりでゲスト講師として招聘し、最前線の現場の声を履修者が聴ける機会は大変貴重であり、Q7 と Q8 以外の項目は、全体平均を上回っている。

2)要望への対応・改善方策

自由記述欄には、特に要望はなかった。当科目は(一社)コンサートプロモーターズ協会の寄付講座であるが、引き続き同協会と連携し、履修者が話を聞きたいと思うゲスト講師の招聘に力を注ぎたい。

3)今後の課題

今年度は、13 名のゲスト講師を招聘した。今後も、履修者自らが積極的にライブビジネス業界の現状と実態を理解し、現実のビジネスへと展開できる能力を身につけられるよう、授業の中で指導していきたい。

以 上

2023 年度(後期・通年)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3567 教員名:中尾 友彰

【音楽活動研究①②③】

教員名:仁科 岡彦、池田 雅明、服部 孝也、浦 丈彦、尾崎 有飛、中村 佳子、彦坂 眞一郎、二俣 泉、中尾 友彰

1)アンケート結果に対する所見

総合満足度は、「思う」が 77.3%、「少し思う」が 18.2%であり、合計すると 95.5%であり、一定の評価は得ていると考える。音楽活動研究①②については、全 15 回の前半に行われる座学で得られた知見をもとに、後半の授業では実際に開催する親子向けクリスマス・コンサートの企画制作を行った。音楽活動研究③については、アウトリーチのプログラム開発を行った上で、実際に小学校や高齢者施設へ出向いた。こうした授業展開により、音楽の持つ力を履修者が実感できた成果ではないか。

2)要望への対応・改善方策

引き続き、本学講師及びゲスト講師が、アウトリーチ等における様々な場所での演奏機会についての講義を行うことにより、「社会における音楽の役割」についての考察に力を入れていく。また可能な限り、実際に小学校等で行うアウトリーチの機会を増やしていきたい。

3)今後の課題

それぞれの専門性を活かしつつ、音楽を通じた自己表現力、プロデュース力、そしてコミュニケーション能力の修得ができるよう指導していきたい。そのためには、上述の通り、一カ所でも多くアウトリーチの機会を増やせるよう努めたい。

以 上